論文の内容の要旨

論文題目　中学校英語科における教室談話研究
—文法指導とコミュニケーション活動の検討—

氏　名　東條 弘子

本研究は、中学校英語科授業において文法指導、ならびにコミュニケーション活動が実施される際の教室談話の様相に着目し、教師と生徒による発話の特徴を明らかにすることで、教授・学習過程を捉えることを目的とした。論文は全 5 部 11 章から成る。

第 I 部「問題と目的」の第 1 章では、日本の公教育での英語科授業を照射した参加者主体型実証研究の重要性を論じた。外国語学習を含む広義の第二言語習得 [Second Language Acquisition: SLA] の分野における先行研究を概観し、参加者の社会的文脈をふまえ、教育内容と教室談話の関係に注目し、初級学習者の言語習得・学習過程を縦断的に分析する必要性を述べた。また国内英語教育界では明治期以来、教養主義と実用主義、または文法指導とコミュニケーション活動が二項対立的に議論されてきた。しかし実際の授業では、同一の英語教師と学級集団成員により、双方の取り組みが連続して実施されることも多い。よって文法指導とコミュニケーション活動実践の詳細な考察により、従来の対立的な議論を超えた新たな視座が、英語教育研究にもたらされる可能性に言及した。

第 2 章では上記の研究課題に即し、本研究で採用する理論的枠組みとしての社会文化理論 [Sociocultural Theory: SCT] と分析概念について述べた。SCT は、SLA 研究において社会的文脈を重視する Lantolf (2000) らにより提唱され、Vygotsky,

Bakhtin, Wertsch の論に基づき、外国語教授・学習過程の検討を可能にする。具体的には、学習の成果のみならず学習過程を照射する発達の最近接領域 [ZPD]、学習者の独り言を即時の言語習得・学習の契機とみなす「私的発話 [private speech]」、発話における話者固有の本音としての「声 [voice]」と、その複数性としての「多声性 [multivoicedness]」の概念に依拠し、参加者による発話の特徴を検討する。とともに、ヴィゴツキー心理学の根幹をなす 3 つの主題 (Wertsch, 1985) に即し、(1) 社会的生活に起源を持つ発話の特徴（第Ⅱ部）、(2) 学習内容の理解を媒介する生徒の発話の特徴（第Ⅲ部）、(3) 発生的・発達的視座から捉えた生徒と教師の発話の特徴（第Ⅳ部）を明らかにした。

第 3 章では、共同研究のあり方と授業観察の方法、ならびに教室談話分析の手法について説明した。本研究の協力者は、都内公立中学校で教歴 29 年目を迎える英語教師である。筆者は 2007 年～2011 年に週 1 回の授業を観察し（計 114 日 226 校時）、音声記録とフィールド・ノーツから談話録を作成した。そして、談話録と教師が記した授業に関するコメントを量的・質的に分析し、教師対象の非構造化インタビューと、教師と生徒による紙面アンケート調査の回答も、部分的に抜粋し参照した。

第Ⅱ部「社会的生活に起源を持つ発話の特徴」では、参加者の発話内容に見られる生活経験を社会的生活とみなし、文法指導とコミュニケーション活動各々で教師が重視する教育活動に着目し、生徒による発話の特徴を分析した。第 4 章では、教師による生徒理解の様相をふまえ、生徒の本音や個性を「声」と解釈し、文法授業における英語の不得手な生徒の英作文記述と発話内容を検討した。その結果、生徒の発話には各自の学校・家庭生活の一端が認められ、教師は定型表現に則った「声」の表出を促し、生徒を正答へ誘う教師主導型対話が生起していた。

第 5 章では、内容重視のコミュニケーション活動としての口頭導入 [oral introduction: O. I.] における生徒の母語による「つぶやき」の特徴を明らかにした。本研究では、教師がつぶやきとみなし、教師による指名や生徒による挙手を伴わない、生徒の自発的な発話全てを「つぶやき」と定義した。「つぶやき」に認められる生徒の生活経験をふまえ、教室談話における「つぶやき」の傾向と様相を検討した結果、以下 3 点を導出した。(1) 生徒の「つぶやき」の総数が、教師の発話数を上回り、教師による発話の 7 割が英語でも、生徒の「つぶやき」の 8 割は母語で発せられ、教師と生徒間の双方向的な対話が生起していた。(2) 「つぶやき」には生徒の生活経験と思考が反映され、英語が苦手な生徒が母語での「つぶやき」を発し、授業に参加していた。(3) 生徒集団が、一斉に「つぶやき」を発して教師に応答しており、多層的な教室談話が生成されていた。第Ⅱ部では、文法指導とコミュニケーション活動実践の双方で、英語が苦手な生徒が「声」を発

して授業に参加する様相が認められ、教室談話における「多声性」が示唆された。

第Ⅲ部「学習内容の理解を媒介する生徒の発話の特徴」では、文法指導とコミュニケーション活動実践において、生徒のどのような発話が学習内容の理解を促進する可能性があるかを検討した。第 6 章では、一人の生徒が 1 校時中に発した 19 回の「わからない」という「つぶやき」に着目し、該当生徒が何を「わからない」のかを分析した。このことにより、英文法が「わかる」授業実践への示唆を得ることが企図された。分析の結果、該当生徒は現在完了と関係代名詞に関する「統語・文構造」ならびに「文法用語・文法概念」の理解に、つまずきを覚えていることが示唆された。そして、英文法が「わかる」授業談話の様相を捉えることが、研究課題として残された。

そこで第 7 章では、前章の知見を得た教師が、授業で英語の不得手な生徒に留意するようになり、生徒間対話を追究するようになったことに着目した。1 年 10 ヵ月間の教室談話の変容過程を、ZPD の概念に依拠し検討した。すると最初は教師による「足場かけ」(Wood, Bruner and Ross, 1976) が機能せず、文型について理解できなかった生徒が、仲間による「足場かけ」を得ることによって、理解の萌芽が見られた。また教師はこの間、授業の「進行役 [facilitator]」を務めるようになっていった。教師が生徒間の協働的な対話を重視し、英語が苦手な生徒による関係代名詞に関する説明を経て、他生徒にも影響の及ぶ様相が観察と紙面アンケートを通して確認された。

第 8 章では、O. I. 実践での生徒による英語での「つぶやき」の特徴を捉えるために、第 5 章で分析した同一授業から、英語の「つぶやき」が最多の事例 3 つを抽出し、教室談話の様相を検討した。教師が英語を多用する中、未習語を復唱する生徒の傍らで、既知の英語をつぶやいて授業に参加する生徒も見られた。そして英語での「つぶやき」が最多であった際には、予習をしてきた生徒による予備知識と、教科書の記述が「媒介」として機能していることがわかった。第Ⅲ部を通しては、文法指導とコミュニケーション活動実践において「媒介」になるのが、「つぶやき」による「多声性」であり、生徒間の協働的な対話が、生徒の英語学習における「媒介」として機能することも示された。

第Ⅳ部では、「発生的分析」に依拠し、教室談話の様相を縦断的に分析し、生徒 3 人と教師による発話の様相を捉えた。第 9 章では、生徒による「つぶやき」の特徴と変容過程を明らかにするために、1 年 9 ヵ月間の教室談話の有り様を継時的に検討した。その結果、以下 3 点を導出した。(1) 生徒の「つぶやき」には 6 類型 12 項目の特徴が認められ、「つぶやき」の特徴や傾向が変容する生徒としない生徒がおり、「つぶやき」には各生徒の独自性が示された。(2) 生徒の授業様式への慣れと、生徒間での信頼関係の成立に伴い、「つぶやき」のあり方が変容し、

学級での学習環境の充実と生徒の心的変容が認められた。 (3) 生徒の家庭生活や友人関係の有り様が、「つぶやき」の様相に影響を及ぼしており、言語学習過程における認知的・社会的側面の双方を捉えることの必要性が確認された。

第 10 章では、教師の発問と意識のあり方に着目し、3 年半の教室談話と授業コメントの変容を分析し、教師の授業に関する学習過程を明らかにした。その結果、以下 3 点が示された。(1) 教師は生徒の認識を尋ねるために、生徒の応答が予測できない真正な質問を発し、母語の使用頻度を増加させ、生徒主体型授業を企図していた。(2) 教師の授業コメントを分析した結果、授業の事実に即した省察が増える傾向が捉えられた。(3) 新たな授業様式の追究過程においても、教師の授業実践は一様ではなく、葛藤の克服が志向される中で、教えることが学ばれることがわかった。第Ⅳ部では、生徒と教師による発話と意識の変容過程が継時的に明らかにされ、生徒の「つぶやき」が、思考を伴う英語で発せられるようになる様相と、教師が新たな授業様式として、生徒主体型授業を追究する過程も明らかになった。

第Ⅴ部「本研究の総括」では、結果の総括、成果、今後の課題を記した。第 11 章では、中学校英語科における教室談話の特徴が検討され、文法指導とコミュニケーション活動としての O. I. 実践における、共通の特徴が確認された。例えば、教師の認知の変容過程に着目すると、文法指導とコミュニケーション活動に関する教師の認知は、当初二分されていた。しかし英語が苦手な生徒による授業参加への留意を起点として、教師の認知が双方間の「媒介」として機能していることが明らかになった。そして最終的には教育内容の如何に関わらず、生徒主体型授業が志向されるようになったことが示された。

本研究の意義は、以下 3 点である。第一に、教室における社会的文脈を照射し、内在的視座から参加者の発話と認識をふまえ、教室談話の様相を帰納的に分析することで、参加者主体型実証研究が着手された。第二に、公教育における英語科教授・学習過程を縦断的に捉え、文法指導とコミュニケーション活動、英語と母語、教師発話と学習者言語の各々を、包括的に検討した。第三に、本研究の知見を介し、授業実践者は自らの教育実践について、研究者は実践者との共同研究の可能性を再考し得ることが示唆された。今後の課題は、日本の英語教育研究における SCT の理論的精緻化と、SCT を含む多様な理論に依拠し、異なる分析手法を用いた実証研究がなされることである。